第 6 回会議の議論概要

1. 事前モニタリングの実施状況について

<決定事項>

- 海水の分析対象核種について、東京電力が核種存在比により評価することとしていた 7 核種について、環境省では分析を行わないこととした。
- 放水口周辺の 8 測点について、東京電力による工事との干渉を避け予定通りモニタリングを実施するため、位置を変更した。

<引継事項>

- 資料の記載方法について、修正が必要。
 - 底層の採取深度について、別紙だけでなく、資料本体にも分かりやすく記載すべき。(福島座長)
→資料 2 - 1 の通り記載。

2. モニタリング結果の情報発信について

<引継事項>

- 参考指標のうち身の回りの濃度として示す値の幅について、引き続き検討が必要。
 - 過去のデータについて、各原子力施設からの管理放出によって従来からある程度高めめの測定値が出ていることについて、一般の方に分かりづらいため説明が必要。(青野委員)
 - 大気圏内核実験の影響が出ている頃からのデータを示すべき。(荒巻委員、飯本委員、鳥養委員、伴委員)
 - 海水について、5Bq 以下にグラフを拡大するなどして、事故前後で減衰している様子を見せるとよいのでは。(荒巻委員)
→資料 3 - 1 の通り修正。
- 参考指標のうち WHO の飲料水基準等の説明について、引き続き検討が必要。
 - それぞれの基準値の意味について、適切・詳細な説明が必要。(伴委員、山崎委員)
→資料 3 - 2 の通り記載。
- EU がスクリーニングにかける値として 100Bq/L と設定している根拠を確認したい。(福島座長)
→次回会議にて、異常値、外れ値への対応方針とあわせて報告・検討。

3. 海洋放出後のモニタリングの強化・拡充の在り方について

<引継事項>

- 速報のための分析の実施方法について、引き続き検討が必要。
 - 案では表層のみとされているが、底層も測定すべきでは。(荒巻委員)

- 案では測点をローテーションするとされているが、定点で頻度を上げて行うべきでは。(伴委員)
- 分析キャパシティを考慮し、最初はある程度余裕を持った計画とすべき。(伴委員)
- 荒天時の代替措置として漁港で試料採取する場合、バックグラウンドデータが無く比較できないのでは。(青野委員)
→資料 4 - 1 及び 4 - 2 の通り検討。

○速報のための分析の結果公表方法について、引き続き検討が必要。

- 専門家会議の確認を経た後の値の名称について、「確定値」ではなく「報告値」などとすべきでは。(青野委員)
- 分析結果の座長確認時に、座長代理による確認も行うなどの配慮をお願いしたい。(福島座長)
- 分析結果の妥当性について評価を行うか否かを判断する目安となる「事前に設定した値」について、地点の特性に合わせて測点毎に考えるべきでは。(福島座長)
→次回以降に議論。詳細は資料 1 - 2 に記載。